

子どもを縛る環境改善

長 威央莉 花田 歌音 馬場 妃花 石井 達徳 作本 善空

中村学園大学短期大学部幼児保育学科

概要

今現在、学校生活を送っている子ども達に対して多くの縛りがあることが目立っており、そこには必要ないものや過剰に反応しすぎているものがあることも事実である。その結果、子どもたちの生活する環境で課題とされている「ジェンダー」や「ランドセル」といったものに加え、学校で定められる「学則」が大人の都合によって子どもたちの人権を侵害している可能性も否定できない状況である。そこで、本研究では女性の美意識事情、中学、高校の校則問題、小学校の学則問題に着目し、子ども大人それぞれにとってストレスフリーな生活を送る為には何が必要であるかについて考えていく

1 章 女性の美意識

多くの女性が美に関心を持ち常に美について考えている。そこで、この章では女性の美についての歴史を考えると共に、女子高校生のメイク事情について考察していく。

1.1 節 女性の美歴史

明治初期まで続いた女性の習慣で歯を黒く染める「お歯黒」は黒い鉄の液体を使って歯を染めるもので、歴史はとても古く、奈良時代に朝鮮半島から伝わったとされている。お歯黒をつけることには色々な意味があり、平安時代には貴族の上流階級の間に広がり男女ともに行われていた。江戸時代には既婚した女性のシンボルとされていたが、明治時代に帯刀や丁まげの廃止と共にお歯黒も衰退していった。

白粉は主に顔へ塗布する化粧品の総称であり、化粧くずれの防止や簡単な化粧直しにも用いられている。元々白粉はその名のとおり肌を白く見せるもので、江戸時代に広く一般に普及した。当時はデンプン、貝殻、粘土、鉛白、甘汞等、様々な原料が用いられたが、このうち鉛白粉はのびや、つきがよく、比較的安価であったため広く使用されていたが、鉛白粉による鉛中毒の問題は深刻となり、明治時代には無鉛白粉が出回り始めると共に 1900（明治 33）年には鉛白粉が使用禁止となった。また、大正時代には肌色や肉色に着色した有色白粉が市販されはじめ、以後、白粉を使った化粧法は大きく変化することとなった。現在、粉白粉のおもな成分はタルク、マイカ、セリサイト、カオリン、二酸化ケイ素（シリカ）あるいはこれらを表面処理したもので、これに白色顔料や着色顔料の酸化チタン、酸化亜鉛、酸化鉄などが添加されている。

平安時代の貴族の女性たちの髪型である「垂髪」は読んで字のごとく「髪をそのまま長く垂らした」スタイルである。平安絵巻に描かれる女性が着ている十二単の裾より長い髪型をしているように平安時代においては髪が長いことが美人のひとつの条件であった。他にも顔の色の白さや切れ長の目、おちょぼ口、ふっくらした顔などが美人の条件であった。白い顔が美人の条件となった理由の一つに暮らしの光環境が上げられる。当時平安貴族の住んでいた寝殿造りでは昼でもうす暗い室内だった為、白粉を塗って暗い中でも肌が美しく見えるようにしたとも言われている。また、大陸からの影響で白い肌は美人の条件という認識も広く浸透していた。

このように、古来より化粧や髪形、服装等は「美」の象徴として考えられており、美に関する意識は女性の DNA に組み込まれているといっても過言ではないであろう。

1.2 節 女子高校生のメイク事情

女子高生のメイク事情について、PR TIMES[1]によると「メイクをしていますか？」という質問に対して 57.4%の女子高生が「している」と回答しており、半数以上の女子高生がメイクを楽しんでいる状況である。内容としてもファンデーションを塗ってのばっちりメイクや目をはっきり見せるマスカラやつけまつ毛などのポイントメイクを楽しんだり、自然な色付きのリップを楽しんだり、女子高生の取り巻く環境によってメイクの取り入れ方も様々なようである。また、女子高生の中でも一番メイク歴が長い高校3年生に「いつからメイクをするようになりましたか？」という質問をしたところ「小学校の高学年から」が 1.9%、「中学生から」が 26.1%であり、中学生からメイクを始めたケースも少なくはないが、「高校1年生から」が 30.8%、「高校2年生から」が 36.4%、「高校3年生から」が 3.7%であり、7割以上の女子高生が高校生になってからメイクを始めたというのが現状である。

2 章 校則問題

この章ではこれまで私たちが経験してきた中で疑問に感じていた校則や部活動による学校独自のルールについて、多くの校則の中でハラスメントに該当するものや時代の流れによって強制されてきたもの等、子どもの人権と尊厳を脅かしている実態について考察していく。

2.1 節 時代錯誤の校則

中学生や高校生は生徒手帳を携帯しており、その中に校則として守らなければならない事項や禁止事項が事細かに決められている。最近では大学生が持つ学生証のようなカードに変化している場合もあり、校則を生徒や第3者が容易に確認できない状況となっている。校則についてはこれまでも様々な議論が成されているが、子ども達を縛る校則[6]として以下について考えていく。

頭髪

「ツブブロックやポニーテールなど、特定の髪型の禁止」

「男子は耳にかかったら切る、女子は肩にかかったら結ぶなどの長さに関する規定」

「染色やパーマなど加工の禁止」

この校則の理由として、学生らしい髪型をする為や清潔感を出す為という意見がある。しかし、そもそも学生らしさとは何なのかと疑問を持たざるを得ない。ジェンダーを含めた個性の抑制を大人の感覚で行うことは時代錯誤ではないだろうか。また、ツーブロックやポニーテールが例として挙げられているが、この二つは十分に清潔感のある髪型である。長さの規定に関しても、髪型によっては規定の長さ以上であっても清潔感を出すことは可能であり、中学生や高校生であれば自身の髪型が清潔か否かを判断する能力を持っている前提で考えるべきである。

制服

「カーディガンやセーターの禁止」

「肌着の色の指定」

登下校時の気温に合わせてカーディガンやセーターを着用することは賢いことであり、清潔な色として白が指定されることが多いが、白は透けやすく、男子間でも肌着が透けている友達に対していじる場面がある等、多感な時期の中高生には悪影響となるのではないだろうか。また、肌着といったプライバシーに関わることを学則の名のもとに強制することは問題であり、その確認を学校が行うことはセクシャルハラスメントになる可能性が非常に高いことも忘れてはならないことである。

その他

「眉毛の手入れの禁止」

眉毛を手入れせずに放っておくと髪型にあったような清潔感がなくなってしまうのではないだろうか。眉毛を全て剃るということは違うと考えられるが、眉毛の長さを調節したり、整えたりすることは清潔感を出すことや身だしなみとして必要なことではないだろうか。

小学校の変った校則

小学生がおかしいと感じている校則として髪型や文房具がある。髪色については地毛証明を求める場合があり、文房具については多くの学校では使用に「シャーペンの禁止やボールペンの禁止」等の制限がある。小学校がシャーペンを禁止する理由として低学年は筆圧が安定せずシャーペンを使ってしまうと芯が頻繁に折れたり、授業中にペンの分解をしてしまう為に学力向上を妨げる恐れがあることや高価な物がある為盗難される可能性もあると考えられている。高学年は使用しても良いのではないという意見もあるが、コンセントの穴に芯を入れる危険性や低学年同様ペンの分解などをしてしまう可能性がある為、高学年での使用も禁止されている小学校が多いのが現状である。鉛筆でもコンセントの穴に入れてみたり、盗難の恐れがあることに変わりはないが、学校側はシャープペンを使用して生まれるデメリットが多いため使用を禁止しているのが実態である。

上記はあくまで一部であるが、大人になってからは自由にできることである。すなわち、「子どもだからまだ早い」「不良を助長する」といった大人の偏見が時代錯誤の校則を生み出していると考えられる。確かに、30年以上前では学校崩壊という言葉が用いられるような状況があった。その当時ではこれらの校則も必要に応じて制定されたことであり、これらの校則が誕生したことを否定することはしない。しかし、様々な規則の制定には温故知新の考え方が基本であるべきであり、それが教え育てる教育者の役目ではないだろうか。

2.2 節 子どもの人権と尊厳

校則という形で明文化されている訳ではないが、風習・習慣として子ども達の人権や尊厳に制約を与えるものが学校教育には存在している。それは指定された制服や部活動における坊主、体操服やユニホームなどである。

はじめに、坊主頭として思い浮かぶのは高校野球である。校則に掲載されている訳でもないのに高校野球を行っている球児達は皆が坊主頭にしている。そもそも野球部は坊主頭にすべきだという風習は 1941 年から 1945 年まで続いた太平洋戦争にあるとされている。当時の早稲田大学の監督、飛田穂州氏が野球を守るために学生野球に軍人の育成というものを取り入れた。その軍規の中に坊主にするというものがあり、これが現代まで浸透しているようである。そういった背景がある中で、今現在の高校球児が坊主にしている理由を調べてみると、帽子をかぶって行うスポーツの為に衛生面を配慮する、また、坊主にすることで精神を勝利に総動員する為というものもある。いわゆる精神論であるが、そんなことで勝てるのなら誰も苦勞はしない。そういった理由がある中で、2023 年の全国高等学校野球選手権大会では非坊主の慶応高校が優勝した。それだけではなくベスト 8 の内、3 校が非坊主であった。これを機に坊主を強制している風習が終焉を迎えることを切に希望するばかりである。

次に、肌露出の多い体操服について、思春期や多感な時期の女子児童・生徒には足を出したくないと考える女性が多く存在している。しかし、学校の決まりや部活のユニフォームという理由で肌の露出が多い体操服やユニフォームを着て運動することを強制されている。教育現場で発生するハラスメント[10]として、セクシャルハラスメント・アカデミックハラスメント・パワーハラスメントがよく知られているが、この中でアカデミックハラスメント・パワーハラスメントはハラスメントを受けた側がハラスメントと感じたからといって直ちにハラスメントとなる訳ではなく第三者による客観的に行き過ぎた行為と判断されてハラスメントが成立するのに対して、セクシャルハラスメントはハラスメントを受けた側がハラスメントと感じた時点でハラスメントが成立するものである。すなわち、動きやすさを理由に嫌だと感じている女性の気持ちを無視して肌露出の多い体操服を指定していること自体がセクシャルハラスメントであり、教育現場による性暴力に苦しむ女子児童・生徒の救済を切に望むばかりである。

3 章 小学生を縛る教育現場

この章では学童期の子どもを取り巻く学習環境について考察すると共に、子どもの最善の利益を考慮して、お菓子の必要性やランドセルの活用、小学生のメイクについて考えていく。

3.1 節 子どもとお菓子

現代の日本では数万種類もあると言われているお菓子は、数々の歴史的な発展から和菓子、洋菓子に、生菓子、干菓子等、様々な分類がある。お菓子の大半が「子どもの喜ぶもの、食べるもの」といった印象を持たれがちである。確かに、お菓子は他の食品と比べてリーズナブルであるため入手しやすく保存も効きやすく、子どもにちょっとした間食として利用するには適したもの

と言えるものである。

大正時代に作られ、現在では大阪の道頓堀に特徴的なデザインの看板が飾られるほど広く知られたものとなっている菓子メーカーの「グリコ」の創業者である江崎利一氏は「国民の体位向上に貢献したい。そのため子どもたちが喜んで食べてくれるものがいい」という思いから、エネルギー代謝に必要な栄養素「グリコーゲン」を含む栄養菓子グリコを誕生させたのである。[3] すなわち、今私たちが抱く印象の背景には江崎氏の思想が広まり、私たちの印象に広く浸透しているからと考えることも出来るのである。

日刊工業新聞[4]によると現在の3～9歳までの子どもを対象にお菓子を毎日食べているという割合は64.5%であり、米国や中国よりも多くなっている。さらに、週に一回以上お菓子を食べる割合は98.5%であり、ほぼすべての子ども達が日常的にお菓子を食べている現状である。日本の保育所や幼稚園、認定こども園ではおやつ時間が設けられ、通園している子どもたちは毎日お菓子を食べている。また、待機児童の子どもたちであっても、食べる機会がないということは割合を見ても考えにくい。一方で、義務教育である小学校や中学校では時間割には昼食の時間はあっても、おやつ時間は無く、学校でお菓子を食べている姿も見ることがない。その理由は、学則に持ち込み禁止と定められているから（府中市立国府小学校学則[5]）である。

高校からは間食としてお菓子を食することが認可されている状況ではあるが、子どもの為に作られているお菓子が小学校や中学校で禁止されていることは日本のお菓子の歴史観に矛盾しているのではないだろうか。

3.2 節 小学校のランドセル

ランドセルは初等教育を学ぶ児童の象徴ともいえる代物であるが、ランドセルの歴史は江戸時代にまで遡る。ランドセルの起源とも呼べる鞆は幕末に輸入され、軍隊で活用されるようになったのが布製の背囊（はいのう）であり、そこから箱型で背負式のランドセルは日本独自のものが明治20年に作成されたのが最初だとされている。明治当時の学習院では当初から制服は採用されてはいたが、通学形態が馬車で通ったり、使用人に荷物を預けたりと様々であった。しかし、学習院はこの状況を是とせず、「学校では皆平等、家庭環境を教育の場に持ち込むことはいけない」との理念のもと、「学用品は自分の手で持ってくるべき」との考えから、明治18年に子どもたちは馬車や人力車で通学することや使用人に荷物を預けることを禁止した。その際に採用されたのが、背中に添えて両手を空けることができ、持ち運びの理念性が良かった軍隊用の背囊であった。この背囊がオランダ語では「ランセル」と呼ばれていた為、それが語源となり「ランドセル」という言葉が生まれたのである。[7]

現在のランドセルは「背負うことによって、子どもの負担が軽減できる」、「両手が自由に使える」等の長所に加え「転倒時のクッションとなる」ということを売りにしている。しかし、メリットもあればデメリットもあり、購入価格平均相場は約5.5万円という実態からも分かるように「価格が高い」ということである。サイズの近いランドセルとリュックの値段の比較ではランドセルはリュックの約20倍、重量では約6倍近い数値となっている。現在ではランドセルが家計の負担になっている家庭も存在しており、昔から祖父母が孫にランドセルを贈るという習慣があるが、核家族化が問題視される昨今、子どもの要求を叶えるために負担を抱える家庭が出てきてい

るのも現状である。また、ランドセルのみで1kgを超えているものも多い中、小学校1年生の段階で国語や算数、生活といった科目の教科書に加え、ノートやドリル、筆記用具を加わることで5キロほどの重量を背負うことになる。7歳児の平均体重は男児で平均23.5kg、女児で平均22.9kgであり[9]、体重の約1/4の重量を背中に背負うことになる。当然そのような重さを背負うことで重心は後ろに傾いてしまい、更には、その重量を支える肩にも負荷がかかってしまう。その為、筋肉痛や肩こり、腰痛という身体的症状を引き起こしたり、中には通学路が長い子どもに至っては、重みによる負荷に苦痛を感じ、憂鬱になるといった精神的症状を引き起こしたりといった原因ともなっている。[8]

これらをまとめると、小学生のシンボルたるランドセルは一般的なりュックサックに比べ、重量や値段が数倍以上であり、現代社会の家族傾向から見れば経済的負担となる家庭は少なくないということと、昔からの習慣が根付いている代物であるということ、安全性の為のランドセルが危険を誘発する可能性があることである。子どもの最善の利益を考えるならば「ランドセルやリュックの採用を議論する前に、収納する重量をまず軽くすべき」と声を大にして言いたい。すなわち、外見的解決よりも根本的解決に向けて議論していくことが必要である。

現在高等教育ではクォーター制度の導入が検討されている。初等教育では現在の3学期制のメリットも多くの人に認知されていることであり、高等教育のクォーター制度をそのまま初等教育に導入することには賛否があることであろう。しかし、発達段階の子どもに1日で多くの教科目を教えることは効果的な学習に繋がると言えるのであろうか。一方で年間の総学習時間を保ったままで1日に学ぶ教科目数を減らすことで子どもの学力が低下するのであろうか。教育行政を含め、大人の社会には現状からの大幅な変更を望まない保守的な考え方が存在している。このような保守的な考えが子どもを縛る教育現場を継続させ続けている大きな要因であることを社会は自覚する必要があると考える。

3.3 節 小学生からのメイク

MAMARINA[2]によると、子どもがメイクをする際の問題点として、かぶれや炎症を起こすことやビューラーを使用したことによる金属アレルギーを起こすこと、また、つけまつげやまつげパーマの接着剤や化学薬品による目の周りの炎症を起こすことが懸念されている。その他にも肌荒れの可能性、肌の老化、ネイルで爪が弱る、子どもらしさがなくなるなどが挙げられている。

これらのことは多くの大人が思うことであると考えられるが、大人では肌が荒れたり自分の肌に合わない化粧品等を使用した場合、自分に合うものを探したり、違うものを使うことが普通である。これは子どもにも同じことが言えるのではないだろうか。それ以上に、アトピーやあざ等の肌にコンプレックスを感じている子どもにとっては、化粧は子どもの肌を守ったり、自分の持っているコンプレックスを隠したりすることもできるものである。子どもの肌は大人と比べて元々美しいものであるがゆえに大人からするとちょっとした見た目の問題であったとしてもそれが強いコンプレックスにより引きこもりやいじめに繋がることもある。したがって、常識的な範囲で子どもの化粧を認めることで苦悩を感じる子どもの救いとなることやいじめ改善に繋がるのではないだろうか。

まとめ

これまで述べてきたように、大人は「子どものため」というもっともらしい建前を作り、子ども達の持つべき権利を奪い縛っている。すなわち、子ども達を取り巻く環境で不都合を生み出しているのは子ども自身ではなく大人たちである。こういった制約があることによって行われるいじめや不良行為があるということを今一度社会全体として考える必要があるのではないだろうか。女性の美意識は女性の DNA に組み込まれているものであり、お菓子も歴史を辿れば本人の為だったり、子どもの為を目的として誕生している。その意味合いが薄れてしまっているのが現状の課題であり、過去先人たちが築き上げたものに縛られるだけでなく、子ども達を神格化してしまわずに一人のヒトとして平等に接していくべきである。したがって、子ども達が真に自由と多様性の中で社会と向き合える環境で過ごせる時が来ることを強く願う限りである。

参考文献

[1] PR TIMES 「【LINE リサーチ】高校 1、2 年生でメイクを始めた人が約 7 割、早い人では小学校高学年や中学時代も約 3 割 メイクの参考は「YouTuber」が最も人気、「Instagramer」「友人」も多数」

<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000002243.000001594.html>

(2023 年 10 月 18 日確認)

[2] MAMARINA 「小学生のメイクはあり？親が感じるメリット・デメリット」

<https://mamarina.jp/problem/elementary-school-student-make-up.html>

(2023 年 10 月 18 日確認)

[3] グリコ 「商品の歴史」

<https://www.glico.com/jp/company/about/history/product/>

(2023 年 10 月 27 日確認)

[4] 日刊工業新聞 「クラシエ 子どもとお菓子のアンケート Vol.9」

<https://www.nikkan.co.jp/releases/view/87198>

(2023 年 10 月 27 日確認)

[5] 府中市立国府小学校 学則

http://www.edu.city.fuchu.hiroshima.jp/~kokufu-shou/rules_kousoku.html

(2023 年 10 月 27 日確認)

[6] メガホン 「問題校則 (ブラック校則)、なぜなくなる？ 廃止・見直しのポイント」

<https://megaphone.school-voice-pj.org/2022/10/post-1943/>

(2023 年 11 月 15 日確認)

[7] 日本靴協会ランドセル工業会 「ランドセルくらぶ：ランドセルの歴史」

<https://www.randoseru.gr.jp/history/rekishi.html>

(2023 年 11 月 29 日確認)

[8] ランドセル博士 「ランドセル症候群について詳しく解説！結局ランドセルは悪いものなの？」

<https://randoseru.kochinews.co.jp/syndrome/>

(2023 年 11 月 29 日確認)

[9] スクスクのつぼ君「子どもの平均体重」

https://www.suku-noppo.jp/data/average_weight_girl.html

(2023 年 11 月 29 日確認)

[10] 人事院「セクシャル・ハラスメント」

https://www.suku-noppo.jp/data/average_weight_girl.html

(2023 年 12 月 6 日確認)